

THE AGENCY パブリックトーク

「Take it like a man – an alternative contemporary men's movement」

日時: 2018年6月6日(水) 19:00-20:30

場所: 森下スタジオ

まず私たちの自己紹介をしたいと思います。それから2017年に発表した作品、『Medusa Bionic Rise』を紹介しながら、どのように作品を作っているのかをご説明し、東京でのリサーチとそのパフォーマンスのクリエイションについてお話ししたいと思います。

THE AGENCY のコンセプトとこれまでの活動

THE AGENCY は4人のメンバーを中心に活動し、こちらの4人は同等な立場で芸術面のリーダーとして関わっています。ラーヘルはドラマトゥルギーを担当、ベルとマグダレーナは衣裳と舞台美術を担当、そしてヤナが演出を担当しています。

THE AGENCY を2015年に結成し、今年で3年が経過しました。私たちはイマーシブ・パフォーマンスと呼ばれる没入型のパフォーマンスを創作しています。過去3年間に発表した代表作として、2015年に『ASMR Yourself』、2016年に『Love Fiction』、2017年に『Medusa Bionic Rise』、今年に『Perfect Romance』を発表しました。私たちは作品の発表と同時に、必ずそれと連携したプログラムを行います。それは、トークであったりプレビューであったりしますが、それら全てが THE AGENCY の活動です。また、劇場だけでなく、美術の専門機関とも仕事をしており、作品の発表は劇場のほか、ギャラリーやフェスティバルであったりします。

イマーシブ・パフォーマンスの「immerse」は、例えばm水であれば、水の中に飛び込んで、その中に浸るというように浸かる、または完全に没入する、囲まれるという意味です。このイマーシブ・パフォーマンスは近年、ヨーロッパでもひとつの大きな流れの一つになっています。一言で申し上げますと、パフォーマンスをするエリア、つまり舞台と観客席がはっきりと分かれていません。一つの空間、または一つの部屋に一緒にいることになりま。サイトスペシフィックな作品創作の潮流も背景にあり、イマーシブ・パフォーマンスは劇場ではない環境に特化した作品として作られる場合もあります。

この没入型の体験を作るために、まずフィクションを作ります。そのフィクションの世界に観客を招き入れ、その世界の中で観客は自由に動き回ることができます。私たちがなぜこのフォーマットを使っているのかというと、それはステージの上から何らかの批判を表現することに限界を感じているからです。

私たちは新自由主義的価値観に取り巻かれ、その中で様々な批判をしています。私たちはその世界の一部にもなっています。そのため、私たちを取り巻く新自由主義的な価値観を転覆させるためにイマーシブなフォーマットを使っています。新自由主義的な経済の仕組みと関わるコーチングであったり、キャスティングであったり、経済的な仕組みと関連性をつくり、発信することで、新自由主義的な価値観を転覆したいと思っています。私たちの問いはどのように新自由主義の世界で主体としての agency を取り戻すことができるのか。観客にも問いかけていることですが、観客はカスタマーであったり、クライアントであったり、あるいは何らかの運動のメ

ンバーとしてパフォーマンスに関わりを持つこととなります。

フィットネスのカルトに着目した『Medusa Bionic Rise』

2017年に発表した『Medusa Bionic Rise』はスイスのバーゼルで発表した作品で、「ムーブメント」というシリーズの一環として創作しました。「ムーブメント」シリーズでは、身体の運動と政治的な運動の関係性を探求しています。例えば、ムーブメントというものがいつ政治的なものになるのか、あるいはデジタル時代以降、ポスト・デジタル時代において身体はどのような意味を持つのか、あるいはクイアな身体はどのようなポテンシャルを持つのかなどの問いです。『Medusa Bionic Rise』で考えたことは身体とテクノロジーの融合から生まれる可能性です。

『Medusa Bionic Rise』はフィットネスのムーブメント、あるいはフィットネスのカルトというフィクションで、自己を増強する過激なムーブメントです。作品では、アナログなムーブメントとともにデジタルなムーブメントも考え、世界中のメンバーたちが定期的に集うオンラインの場を提供し、それをミッション・コールと名付けました。ミッション・コールというメンバーの集まりがパフォーマンスとなっていて、様々な意見を交換し、新たなメンバーを募ります。身体とテクノロジーが融合したときのポテンシャルとは、ユートピア的なポテンシャルなのか、それともディストピアなポテンシャルなのかを探求することが興味の一つでした。様々なエンハンスメント、身体増強、あるいはオプティマイズ、最適化する方法を調べました。ニューロ・エンハンスメントやボディハッキング、フィットネス、整形手術、あるいは身体と精神の標準化などです。そこにはクイアなポテンシャルというものはあるのか。つまり身体を超えたところに至る可能性についての問いもあります。

このフィクションの世界を作り上げるためのキャスティングとして、メインキャストを女性にしました。テクノロジーの世界では男性がより支配的な傾向があり、その世界では女性が活躍することに対するスティグマがまだあると思います。世界には女性だけではなくクイアな人、あるいはジェンダーを超越している人、白人だけではなく有色人種の人、あるいは人々とは異なる能力を持っている人、そして障害のある人も含め様々な年齢層の人たちをキャスティングしました。このように一つの目的の下で様々な身体をキャスティングすることで、どのような世界が作れるのかをある意味で提示しました。

衣裳では、例えば、シェリーというキャラクターはが極端な整形手術をしています、その彼女の表象はコスチュームを含めてイメージを作りました。ボディ・ビルダーはフィットネスあるいは人体増強のある極端な例です。空間については、劇場ではないサイトスペシフィックなパフォーマンスにすることがとても重要だと考えました。バーゼルの街の中心の廃墟になったショッピング・センターを舞台としましたが、そこに行くまでには赤線地帯を通る必要があり、人がなかなか気づかない建物をあがると『Medusa Bionic Rise』の世界がある。ある意味で資本主義の廃墟の中に秘密の道を抜けてその世界に入るというセッティングでした。これはある意味『Medusa Bionic Rise』のムーブメントがこのスペースを占拠し、取り戻すという意味もありました。

メインのパフォーマンスでは、様々なキャラクターが多様なエクササイズを行い、また対話があったりしますが、観客は自由に動き回れます。すごく近くに寄ったり、あるいは距離をとることもでき、バー・エリアではキャストと対話をし、身体増強のためピルを飲むこともできます。

メインのパフォーマンスの空間のまわりには小さな部屋があり、ミッション・コールのメンバーに誘われ、その中に入ると、そこでは一对一のシチュエーションがあります。このパフォーマンスでは何かを見せるという状況と何かをシェアするという状況の両方が起きています。またゲーム的な要素もあり、フィクションの世界に入る込むこともできます。「アバ」というアバターがいて、このアバターがメインスペースでのパフォーマンスの指示を出しました。

オンラインの世界では、『Medusa Bionic Rise』のムーブメントの中で行われている様々なリサーチや映像があり、観客はそこに参加できます。このミッション・コールに興味があれば、ウェブサイトから契約書をダウンロードして、「Medusa Bionic Rise」のメンバーになるという契約書にサインをして参加できます。これまでではどちらかというところでも小さなグループで親密な関係をつくる試みでしたが、この作品では一对一の親密な関係がありながら、メインのショーがある、そういったコンビネーションをつくったことで新たな可能性を感じ、これからも追求していきたいと思っています。また、ムーブメント、つまり運動の可能性、特に現代における運動の可能性にとっても大きな問いを抱えていることを実感しました。

男性性をテーマとする「Contemporary Movement of Manliness」のリサーチ

東京では、「Contemporary Movement of Manliness」という仮タイトルでリサーチをしています。近年、米国やヨーロッパでは右翼的な運動の勢いが増しています。これらの運動はジェンダーの特定のイメージと結びついている気がしています。それは保守的なジェンダーの考え方で、それによって右翼的な動きが勢いを増している。その中では典型的なマスキュリティのイメージが使われ、例えば、Angry White Man、怒った白人男性という意味ですが、このようなイメージが頻繁に使われている運動を目の前にし、右翼的ではない現代の男性性、男らしさについて考えたいと思っています。その際には白人中心ではなく、規範的な異性愛ではない男性性を考えるのが重要だと思っています。約一年半くらい前ですが、ちょうどそういったことを考えてたときに草食男子という言葉を知りました。これまで規範とされてきた白人中心のであったり、異性愛中心の男性性を転覆させるという意味でポテンシャルのあるものと感じました。例えば、どのように愛とセックスを分けるとか、あるいはどのように関係性を築いていくのかということに新しい視点が見つかるかもしれない。新自由主義的な次の世界では関係性がなくなると言われていますが、そういった意味でも草食男子に興味を持ち、掘り下げたいと思いました。

こちらにいらっしゃる方々には「草食男子」は馴染みのある言葉であり、この「草食男子」が流行語大賞になったのが約10年ぐらい前なので、どちらかというと時代遅れな言葉なイメージもあるのではないのでしょうか。まずヴィジティング・フェローとしてヤナが来日したときのリサーチについてお話したいと思います。まず、ヤナは草食男子という言葉を作った人に会いたいということで、「草食男子の恋愛学」という本の著者や草食男子の研究者に会いました。まず一つの発見としては草食男子という言葉の意味は多様で、定義があるようでない。メディアで使用される場合にはすごくネガティブなイメージだが、草食男子という言葉を世に出したコラムニストの深澤真紀さんは非常にポジティブに考えています。そして、草食男子について理解を深めていくうちに、草食男子に会ってみたいと思うようになりました。ただ、実はこれが非常に難しく、草食男子の友達がいなかった

色々な人に聞いてまわったのですが、なかなか捕まらない。女性に聞くと「知ってるよ」という人がすごく多いのですが、男性に聞くとハッキリとしない反応でした。結局、女性から紹介された「草食男子」と呼ばれている人に会いました。まず、インタビューで「草食男子ですか？」という質問しましたが、「そうは言われるけど、自分では草食男子とあまり思っていない……」のような返答で、アイデンティティとはつながっていないことが分かりました。それでも「あの人って草食男子っぽいよね」という話は途切れない。そこでもうちょっと広い文脈で捉える必要があるように感じました。

今回の日本でのリサーチでは、男性運動の歴史、そして日本における様々な男性性、男らしさのイメージについて調べています。また、現代の男性性についてはフェミニズムであったり、フェミニスト運動、クィア学、ゲイ・カルチャーといったものと深く結びついているという印象を受けています。まず、日本で男性学を提唱しメンズリブの運動を始めた学者の伊藤公雄さんと多賀太さんとお会いしましたが、

多賀さんは日本では侍であったり、あるいは軍隊の一部としての兵士、あるいはサラリーマンだったり、歴史上の様々な男性性のイメージが影響し合い、現代の男性性のイメージにつながっていると説明してくれました。伊藤さんと多賀さんはサラリーマンとしての男性像がものすごく強くある中でフェミニストのムーブメントが始まり、そのときに自分たちは男性としてどうすればいいだろうとすごく戸惑ったという話をされていました。例えば、男もフェミニストになれるのかといったシンポジウムがあり、参加したようですが、結局、男性はフェミニストにはなれない、男性独自のムーブメントが必要と思ったそうです。

彼らにとって自分たちはフェミニストになれないということは明白で、しかも男性として何かをしなければならぬという思いもあり、社会、そして経済を変えるためには男性自体が変わらなければならないと考えたそうです。男性が集う空間で様々な意見を交換してお互いに学び、既成のイメージあるいは価値観、実践ではないもの、もっとオルタナティブな男性性のイメージや価値観、実践を男性自身が見つかる必要があるという問題意識で彼らの運動が始まりました。

具体的には、大阪に 1995 年にメンズセンターというのが立ち上げられました。そこに男性が集まり、意見交換をして学び合うことができるのですが、そのような人々が集う具体的なフォームがあることにとっても興味を持ちました。メンズセンターは「男性をマスキュリニティの重荷から解放しよう」というスローガンを掲げていたそうです。例えば、妊娠を体験するためにお腹が膨らむベストがあつて、それをみんなで着て妊娠を疑似体験してみるとか、ドラッグ・クィーンのワークショップであったり、あるいは外に出てフィールドワークをしたり、自分たちの意識を高めて男性性あるいは女性性について考える活動が行われていました。

メンズセンターは 1995 年に開館し、2005 年前後に閉館しました。なぜ閉館したのかという問いに対して、いくつかの異なる答えが返ってきました。その一つは最初に目標として掲げていたことを達成できたという返事で、自分たちが掲げていた目標が政府に内包されるようになり、例えば、男女共同参画センターが出来、そこに関わっているからムーブメントとしての必要性がなくなったという答えもありました。それは私たちから見ると組織化したということですが、それはとても興味深い点だと思いました。もうひとつは政府から自分たちの活動を止められてしまうような動きがあったそうですが、詳しくは聞くことができませんでした。彼らのゴールはフェミニスト的なアジェンダをもって活動していたのですが、それらが政府によって阻まれるような状況があったそうです。

私たちがひとつ疑問に思ったのは、このメンズリブの運動というのは異性愛的な運動だったのか、それともマ

イノリティに開かれた運動だったのか、例えば、クィアやトランスジェンダーなど様々な人々が運動に関わっていたのかという問いがあります。

フェミニズムとクィア理論の研究者である清水晶子先生にお会いしてお話する機会がありました。清水さんにメンズリブの現状について質問したところ、彼女自身、答えるの躊躇されていて慎重にお答えになっていました。日本でフェミニズムの運動が始まってすぐに男の人たちが全面に出てきたので、それがちょっと早すぎたのかもしれないというお話しでした。私たちがそれを聞いてとてもショックでした。日本のフェミニストの運動であったり、あるいはクィアの運動に対する様々な反対というのがすごくきつく、大変であったとが、そういうときにメンズリブも連携し、団結できたらよかったのにとコメントもありました。そこで出てくるひとつの問いはどのように現代の男性運動を団結することが出来るのかということで、これはフェミニズムの運動の中でもとても重要なテーマで、追求していくべき問いだと考えています。

団結・連帯の話を少し深めたいと思いますが、それはポスト・アイデンティティの運動とは何かということだと思います。現代の男性性運動と私たちは言っていますが、これは「男性」ではなく「男性性」つまり masculinity あるいは manliness と私たちは言っています。それは身体的な生物学的な男性ではなく、行動としてどのように男性性というのが作られているかに興味があるからです。そこでその現代の男性のムーブメントではなく男性性のムーブメントで、男性でありながら、どのようにクィアの運動であったり、フェミニズムの運動に紛れることなく、でも連帯して社会を変えていくことに関われるという問いだと思います。今ムーブメントとしては特にLGBTのアイデンティティ、あるいはクィアに関心があるというところに関かれたムーブメントというのが主流ではあると思いますが、ヘテロセクシャルなアイデンティティを持っている人というのは必ずしもそこつながる接点はないかもしれない。そう言ったヘテロなコミュニティの人たちがどのような運動と関わっていけるのか、連帯することができるのか、ということを考えています。

今後のクリエイションの方向性

「Contemporary Movement of Manliness」という仮のタイトルですが、2019年にミュンヘンのカンマーシュピレー、ゲスナーアーリーチュールヒ、FFT デュッセルドルフ、そしてゾフィーエンゼーレ・ベルリンで発表する予定で、日本でも発表したいと思っています。

次のステップとしてはミュンヘンのロデオ・フェスティバルで創作をします。そこではイマーシブな世界を作る、そのフィクションを作ります。そして、その運動に関わっているメンバーが何を実践しているのかを想像し、フォーマットとしてはオンラインとオフラインの両方があると想定しています。オンラインでは、フィクションのキャラクターや、様々な人が参加できるコミュニティやフォーラムがあり、そのフォーラムの中で色々な言説が扱われるイメージです。オフラインというでは観客が参加できるパフォーマンスで、これはある種のメンズセンターを想定しています。

キャラクターはムーブメントの代表となって活動する人たちで、ロールモデルとしてムーブメントの中にいます。そのロールモデルを見て参加する人たちも自分たちのアイデンティティを形成するので、メンズセンターのキャラクターはどのように男性として行動するのか、どのような男性の態度をとるのかなど、そのあり方がとても多様

である必要があります。その中には Angry White Men、怒った白人男性というキャラクターもいると思います。

オフラインのメンズセンターはポップアップスペースとして色々なところにいつでも立ち上げられるものを想定していて、必ずしも劇場だけではないと考えています。劇場をツアーしながらムーブメントを推進し、パフォーマンスをすることでムーブメントのメンバーが拡大していくイメージです。

男性のムーブメントは必ずしも男性だけで担うべきではなく、女性も担いますが、そのキャスティングが重要だと思っています。つまり、多様性を見せていく、開いていくということが重要で、男らしさがどういうことなのかというその可能性を広く見せていくために、キャストで見せることがすごく重要だと思っています。キャスティングはインターナショナルで日本からもヨーロッパからも参加する、色々な人種の人が参加し、男性として生まれたけれど男性のジェンダーを持っていない人、あるいは男性として生まれていないけれども男性のジェンダーを持っている人など、様々な人が関わっていることが重要です。それと同様に、観客もすごく重要で、観客のジェンダーのアイデンティティと参加方法についてよく考える必要があると思います。

空間はコミュニティスペースのようなパブリックで、パフォーマンスを行えるセミパブリックな場、誰でも集え、でも男性が自分の感情について安心して話せる場所を作らなければならない。それはもしかしたらジムかもしれないし、森の中あるいは銭湯などのリラックスする場所や、サイトスペシフィックな空間を作る考えです。

コスチュームは日本のサブカルチャーにインスピレーションを受けたものを考えていて、例えば、渋谷とか原宿でも見られるかもしれませんが、アンチファッション、何らかの反抗として過剰なファッションをイメージしています。ヨーロッパと比べ、日本で服装というものが政治、自分の政治性につながっているのかという問いもそこにあります。

ここでひとつ重要なのは、このコスチュームによってこのムーブメントに関わっている男性がすでにあるクィアやサブカルチャーの一部に見えてはいけないと思っています。仕事と関連する服装、例えば、サラリーマンが着ている服は自分の仕事に属しているというサインで、工事現場で働いている人が着ている作業服、それも何らかの役割や機能、仕事のサインとしてあると思います。日本だけではなく、世界中でポスト・ジェンダー、ジェンダーレスなファッションが生まれて色々な国や地域で流行っています。いわゆる古典的な男らしさの次を提示するというのがすごく困難な状況を示していると思います。

今私たちが色々とお話したことをお聞きになって男性性というのはすごく曖昧なものであることをご理解いただけたと思いますが、私たちが今、取り組んでいるリサーチを解体し、それを分析して、どのようにしてフィクションと組み合わせていくかというところが一番興味深いポイントになると考えています。皆さんと一緒にお話しをすることで現代の男性性、男らしさのロールモデルのオルタナティブな形というものを皆さんと一緒に作っていただければと思っています。

(以下、質疑応答略)